絵画の中のはきもの

サンタクロースをもう一度

見　一　眞理子

「サンタさんは自転車に乗って帰るの？」

教会から頼まれたサンタクロース役を終えた父が、子供たちに見つかってしまったと笑いながら帰宅しました。また、老人ホームのおばあちゃんたちからは「外国の方が日本語をしゃべったぁ！！」と驚かれたことを満更じゃない様子で話していました。

父は日本人離れした顔立ちに加え、「靴職人」という職業の持つファンタジックなイメージが混じり合ってか、いろいろなジャンルの方からお声が掛かっていたことを思い出します。靴メーカーの宣伝に起用されたり、テレビや雑誌の取材を受けたりと、自分のキャラクターを結構楽しんでいたように感じます。クリスマスのボランティアも快く引き受けて、この日のために自慢の髭をさらに伸ばし逆毛を立てて膨らますという念の入れようでした。

私が二紀展の公募に初めて挑戦した時に「靴職人」をテーマに描こうと決めたのも、父に向けられた多くの熱い視線に刺激されたからでした。主軸になるモチーフやモデルとの出会いは、作品を継続的に制作していくうえでとても重要な要素です。靴職人の娘だからこそ描ける生涯のテーマを得られたことは、私にとってラッキーなことでした。

三月に父の仕事場を改装してオープンした“ミイチ珈琲店”には、昔靴を作ってもらったというお客様がたくさん見えて、今でも父の話題が絶えません。皆さんのお話を伺うたびに、白い髭のキャラクターの健在ぶりに驚かされています。そして、「注文靴」の履き心地は、お客様の足にフィットするだけでなく、靴に縫い込まれた職人の手の温もりもプラスされているのだと、父の続けてきた仕事を改めて想う場所になっています。

今まで私は絵の中で、「もう一人の父」を自由気ままに動かしてきました。それは父娘二人で楽しみながら作り上げたキャラクターです。そんな「父」を久し振りに呼んでみたくなり、今年のクリスマスには店のギャラリーで絵本展を計画中です。サンタクロースの赤い服を着た父にカフェを大いに盛り上げてもらおうと思っています。

「まだまだ眠ってなんかいられませんよ、お父さん！！」

プレゼントを渡すサンタ姿の父